

鞠ノ沢の地名

——古代窯業地の刻印——

一 はじめに

青森県内には亀ヶ岡、貝塚、古館などのように明らかに考古学的遺物や遺跡の存在によって成立したと思われる遺跡地名が多数ある。以前筆者は、本誌上にこれらの地名を集成し成立要因や年代について述べたことがあるが、最近になって重要な遺跡地名それも青森県ではきわめて少ない、古代に成立したとみられる地名の存在に思いいたった。五所川原市にある「鞠ノ沢」という地名である。この地名については従来ほとんど注意されず、みるべき研究発表がない状況である。小稿では考古学的立場からこの地名の成立要因・年代について述べてみたい。

二 鞠ノ沢の須恵器の窯跡

鞠ノ沢は五所川原市大字前田野目にある小字名で、梵珠山系に源をもつ前田野目川の右岸地域にある。位置的には浪岡町から五所川原市にいたる国道一〇一号沿いの二ツ谷部落の北にあたる。

筆者がこの地名にはじめて接したのは昭和四三年五月、五所川原市教育委員会が実施した前田野目地区（鞠ノ沢・砂田地点）の須恵器窯跡群

の発掘調査を見学した時である。これらの窯跡は昭和四二年九月下旬に偶然発見されたが、当時須恵器の窯跡としては県内初の事例で、しかもわが国最北に位置するため考古学界はもちろんマスコミ等で大いに注目されたものであった。

鞠ノ沢地点では窯跡一基が確認・調査された。その結果、一部は既に破壊されていたが幅一・五〜二・三米、全長九・二米の半地下式無段の構造をもつ登り窯跡であることが確認された。内部からは須恵器の坏・椀や細口壺・無頸壺などの破片が出土し、窯跡の年代は、調査を担当した坂詰秀一氏によって一〇世紀末〜一二、三世紀と考えられた。しかしこの年代についてはのちに一〇世紀頃とする考え方や一〇世紀末〜一六世紀代とする考え方も出されている。

三 鞠ノ沢の地名の意味

「鞠ノ沢」の地名が文献に登場するのは県内ではきわめて古く天文年間（一五三二〜一五五五）に書かれたとされる『津軽郡中名字』であり、このなかの奥法郡に「圓沢」と見えるのがそれである。この後江戸時代になって貞享元年（一六八四）の『津軽郡郷村帳』には寛文四年（一六

六四)以降の新田として鞠野沢村三一九・六石の記載がある⁽⁷⁾。また『平山日記』には元禄三年(一六九〇)に鞠沢村とあり、飯詰組に属し、村位は下であったとある⁽⁷⁾。そしてこの後明治九年(一八七六)に前田野目村に合併され⁽⁷⁾、現在にいたっている。

さて、鞠ノ沢の鞠であるが、圓とか鞠と書かれることからわかるように漢字の意味よりもマリという音に注目しなければなるまい。これに關する重要な記述は、一般的によく引用されるものであるが平安時代初期の承平年間(九三一〜九三七)に源順が著したわが国初の分類体辞書である『倭名類聚鈔』⁽⁹⁾にある。すなわち卷第十六の器皿部の金器類には金椀 日本靈異記云其器皆鏡―俗云賀奈萬利今案鏡字所出未詳古語謂椀為磨利宜用金椀二字也椀即盃字見瓦器中

また、器皿部の瓦器類にも

盃 説文云盃―烏管反字亦作椀辨色立成云末里俗云毛比―

小孟也

とある。

この記載によって椀や盃が平安時代以前に萬利・磨利・末里(マリ)や毛比(モイ)と呼ばれていたことがわかる。そして、前述の鞠ノ沢の窯跡から出土した須恵器の坏・椀つまりマリは、鞠ノ沢の鞠と関連性がありそうである。以下、この点についてさらに検討する。

四 若干の考察

前田野目の窯跡の調査後、須恵器窯跡は周辺地域で多数発見され、現在では前田野目地域内では砂田・鞠ノ沢のほか川崎(真言館)⁽¹⁰⁾・桜

ヶ峰⁽¹⁰⁾、また前田野目地域外では五所川原市持子沢隠川・原子山元(山道溜池)⁽¹⁰⁾・鶉野⁽¹²⁾、青森市三内・安田⁽¹³⁾、浪岡町郷山前⁽¹⁰⁾で確認されている。

一方近年、三辻利一氏により積極的に進められている蛍光X線による須恵器の胎土分析によって前田野目・持子沢地域の窯で生産された(五所川原窯跡群産)須恵器が近隣の津軽地方以外に下北半島^(14 a, b)や北海道南部・北部さらにはオホーツク海沿岸⁽¹⁶⁾に至る北日本地域に広く供給されていたことが判明してきた。

このように梵珠山南部の前田野目川を中心とした地域にはかつて北日本地域に広く知られた一大窯業地があったことが次第に明らかになってきたのである。

これらの窯跡群の年代は、前述の諸説があるものの最も新しい須恵器の年代観によれば持子沢窯跡群は前田野目窯跡群(一〇世紀後半〜一一世紀)より形式的にやや古い(一〇世紀前半)⁽¹⁷⁾とあって、少なくとも五〇〜一〇〇年の操業期間が考えられる。マリ(盃)の語は田辺昭三氏によると、「…中世以後の文献には『かなまり』の語のみ残り、『まり』の語は使われていない⁽¹⁸⁾」ということであって、これらのことから考えると鞠ノ沢の地名は、文献上は一六世紀までしか遡りえないが、古代のマリと鞠ノ沢窯跡出土の椀とは年代的にも密接な関連が考えられてよいことから鞠ノ沢は平安時代後半には既に成立していた地名と考えられるのである。鞠ノ沢は椀(マリ)の沢つまり須恵器(椀)を生産した沢(前田野目川であろう)あるいはその生産者が居住した沢という考え方もできよう。鞠ノ沢で発見・調査された須恵器窯跡は一基のみであるが付近には別の窯跡が埋もれている可能性はきわめてたかい。また付

近では須恵器製作の工房址や工人達の（堅穴）住居跡の存在は報告されていないが同様に今後発見される可能性はきわめてたかい。

ちなみに須恵器の呼称は大和朝廷の土師器などの製作者¹¹土師部に対する陶部の名称¹²に由来し、その居住地を表しているとされる須恵・陶の地名は西日本にある。¹³ 事実、記紀に見える陶邑¹⁴（現在の大阪府南部にある）は須恵村と考えられていたが実際にその地域から多数の須恵器窯跡群が発見されて¹⁵おり、鞠ノ沢の地名の成立事情と共通している。

五 おわりに

ここ数年県内の遺跡地名を捜しているうちに、一〇〜一一世紀に北日本一帯に多量の須恵器を供給し一大須恵器生産地として知られたはずの前田野目・持子沢窯跡群に関する記録・記憶が何らの痕跡も残さずに消え去ってしまったものかという疑問が生じ、結果的に鞠ノ沢の鞠と須恵器の椀に行き着いた。県内の古代の文献はほとんどなく古代に成立したとみられる地名はきわめて少ない状況である。しかしながら県内各地には平安時代の堅穴住居跡群（集落）が分布し、近年大規模な製鉄関係の遺跡も知られるようになってきた。それらには当然何らかの地名があったはずである。およそではあるが年代を特定できる考古学的遺物・遺構によってほかにもまだ古代地名が突きとめられるはずである。今後このような観点から遺跡と地名との関係に注目していく必要がある。

小稿を終えるにあたって種々御教示頂いた弘前大学人文学部の小口雅史および青森県埋蔵文化財調査センターの三浦圭介両氏に心から謝意を表する次第である。

注

- (1) 福田友之「青森県の遺跡地名ノート」『弘前大学国史研究』第八〇記念号 一九八六年
- (2) 一九六七年一月一日(月)付けの陸奥新報および翌一七日(火)付けの東奥日報朝刊。また「グラフ北限の須恵器窯跡」(『月刊考古学ジャーナル』第二号 一九六八年)など。
- (3) 五所川原市教育委員会『津軽・前田野目窯跡』一九六八年
- (4) 桑原滋郎「津軽で作られた須恵器」『考古風土記』第二号・一九七七年
- (5) 山本哲也「擦文文化に於ける須恵器について」『國學院大學考古学資料館紀要第四輯 一九八八年
- (6) 『新編青森縣叢書』第一巻下 一九七四年 歴史図書社
- (7) 篠村正雄「鞠野沢村」『青森県の地名』一九八二年 平凡社
- (8) 大槻文彦「まり」『新訂大言海』五〇版 一九七五年 富山房
- (9) 中田祝夫編『倭名類聚抄』一九七八年 勉誠社
- (10) 村越潔・新谷武「青森県前田野目砂田遺跡発掘調査概報」『北奥古代文化』第六号 一九七四年
- (11a) 坂詰秀一「速報」津軽・持子沢窯跡の調査」『月刊考古学ジャーナル』第七五号 一九七二年
- (11b) 坂詰秀一「速報」津軽・持子沢窯跡の第二次調査」『月刊考古学ジャーナル』第八九号 一九七三年
- (11c) 坂詰秀一「津軽持子沢窯跡調査概報」『北奥古代文化』第五号 一

九七三年

(12) 一九八四年一月二六日(月)に県文化財保護指導員の新谷雄蔵氏とともに鶉野遺跡で確認した。

(13) 一九八〇年五月二〇日(火)付けの東奥日報夕刊による。

(14a) 三辻利一「境関館遺跡出土須恵器の胎土分析」(青森県教育委員会(以下、県教委)『境関館遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書(以下、県報告)第一〇二集 一九八七年)

(14b) 三辻利一「山本遺跡出土火山灰と土器の蛍光X線分析」(県教委「山本遺跡発掘調査報告書」県報告第一〇五集 一九八七年)

(15) 三辻利一「弥栄平(四)遺跡出土須恵器の胎土分析」(県教委「弥栄平(四)遺跡発掘調査報告書」県報告第一〇六集 一九八七年)

(16) (財)北海道埋蔵文化財センター『深川市納内三遺跡』(同調査報告書第六〇集 一九八九年)のなかで三辻利一氏は同遺跡出土の須恵器が胎土分析の結果、五所川原窯跡群産と推定されたことを報告した(三辻利一「深川市納内三遺跡出土須恵器の蛍光X線分析」)。また越田賢一郎氏は北海道出土の須恵器のうち胎土分析が行われたものの分析結果一覧表を示した。それによれば五所川原窯跡群産と推定されたものはほかに松前町札前、森町御幸町、小樽市餅屋沢、恵庭市中島松七、常呂町トコロチャシ南尾根・TK六七遺跡などから出土している。

(17) 青森県埋蔵文化財調査センターの三浦圭介氏の御教示による。

(18) 田辺昭三「まり」『日本歴史大辞典』第七巻 一九七二年 河出書

房新社

(19) 金井弘夫編『日本地名索引』下 一九八一年 アポック社
(20) 田辺昭三「陶邑古窯址群I」 一九六六年 平安学園

追記

筆者は前述の「青森県の遺跡地名ノート」七〇頁において「本県の貝塚遺跡に巨人伝説が伴う明確な例はない」と述べたが、その後天間林村二ツ森貝塚について次の記載があることを知った。本論とは直接の関連はないが「貝塚」等の遺跡地名を考えるうえで見過せぬものでありあえてここに引用して訂正したい。

「土人等古傳を語る、太古手長婆と足長爺とあり、爺婆を負ふて海に入り、婆手を伸べて貝を撈ふ、相依りて以て生活す、食ふて棄つるところのもの即此貝盛なり」と(佐藤重紀「陸奥国上北郡の貝塚」『東京人類学会雑誌』第六巻第五九号 一八九一年)。

また、同じく七〇頁に述べた手長足長伝説についても白神岳、市浦村相内のほかに田子町貝守ヶ岳(三戸町貝名森のことであろう―筆者注)(森山泰太郎「手長婆」『陸奥の伝説』 一九七六年 第一法規出版)や上北町(前掲、佐藤重紀報文)さらには五戸町北市川地区(小井田幸哉『川内村誌』 一九五五年)にあることがその後あらたにわかった。ちなみに上北町大字上野には小字名として手長が現存する。しかしこれらはいずれも貝塚遺跡との関連性はないようである。

(青森県立郷土館主任学芸員)